

真玉橋に埋め込まれた祈り

—沖繩の人柱伝説が意味するもの—

栗原 健

はじめに

数ある沖繩の伝説の中でも異彩を放つのが、「真玉橋（まだんばし）の人柱」である。「国場川にかかる石橋を築造した際に、七色元結（ムーティー）をした女性を人柱にした」とするこの物語は、近年では大城立裕による新作組踊『真珠道』（2004年初演）に取り入れられるなど、現在でもよく知られている。この伝説の源流や成立過程については、すでに中村史が「沖繩・豊見城村の伝説『真玉橋の人柱』」（1999年）において入念な分析を加えており、その卓越した考察には異論の余地が無いように思える¹。しかしながら、同論考で中村が詳しく論じなかった事柄もある上に、この伝説の重要性を理解するためには、人柱の機能やその史実性に関する最近の議論についても目を配るべきであろう。

本論では、中村の論を補う形を取りながら、真玉橋の物語の背後に隠れた豊かな伝承世界を垣間見てみたい。まず伝説の成立過程について中村の議論を追い、彼が掘り起こした「橋建設の際に女性の髪を埋めた」という伝承の妥当性について、毛髪の霊力をめぐる習俗をもとに考える。その後、人柱伝承の背景をなす自然観について近年の研究者の議論を検討し、真玉橋の話が示す沖繩の地域性について考察したい。最後に、沖繩を含めて国内数か所で発見された、人柱の可能性のある人骨についても紹介する。

1 真玉橋と人柱伝説

真玉橋は那覇と豊見城市を結ぶ交通の要衝であり、その歴史は16世紀にまで遡る²。すでに1522年、那覇港と首里城を守る防衛線構築の一環として、尚真王によりこの地に木造の橋が架けられている。しかしながら、木橋は水害に対して脆弱であり流失しやすい。このため1707年9月から翌08年3月にかけての工事により、橋は石橋に替えられた。この事績を記録した橋碑によると、7か月の間にのべ8918人の石工と8万3676人の役夫が動員されており、異例の規模の国家的大事業であったことがうかがえる³。この石橋も1809年・35年の洪水において大きな被害を受けたため、1836年3月から翌37年4月にかけて改修工事が行われた。今回の動員数も石工のべ1万258人、役夫7万8226人を数え、真玉橋の重要性を示すものとなっている⁴。

完成した橋の長さは約110メートル、幅約4.8メートル。5つのアーチを擁する石橋は、王府の土木技術の粋を集めた優美な姿を誇り、1924年にこの地を訪れた建築家の伊東忠太も、「その形の美しさ、見れば見るほど心持の良い」と激賞している⁵。惜しくも橋

は太平洋戦争末期に日本軍によって破壊され、戦後コンクリート製の橋に架け替えられた。4代目にあたる現在の真玉橋が完成したのは2002年である。ただし、旧橋のアーチの一部が改修工事の最中に発見され、遺構は部分的に移設されて保存されている。

この橋にまつわる人柱伝説には複数の種類が存在するが、よく知られているバージョンとして、『日本伝説体系』収録のものを見たい。

昔ね、真玉橋の話でね、七ムーティー（七色元結）というのがあった話を、お婆さんたちから聞いたよ。それで、親子が三人で暮らしてね、七ムーティーをしている女の人が、あっちこっちの村を拜むのをやっていたらね。そしたらね、真玉橋は、いくら架けて流れても、りっぱに架からなかったらしいけどね。それで、その話を造った人がね、「これは残念なことだ。どうしようかなあ」と言って、こう思っていたときにね、この七ムーティーしている女がね、通りかかったらね、「この橋はどうして架からないのかね、娘さん」と言ったので、「これはもう、ここに七ムーティーしている人を埋めないことにはね、この橋は架かりませんよ」と言った。それで、橋の近くを何かこう捜したけれど、七ムーティーの人は、いなかったんだね。もしやこの女が、七ムーティーしているかもしれないので、この女の人の髪の毛をみてみたらね、七ムーティーしていたんだね。このことが原因でこの人は、橋に埋められてしまうことになったんだけどね。その家には、親子三人だけど、女の子が一人いたんだね。それで埋められに行くときね、母親が娘に、「おまえはね、もう顔は美しいからいいけれど、人より先にもものは言うんじゃないよ」と言って、別れて橋の下敷きになったんだね⁶。

この後、父親と娘は山原のほうに身を隠すのであるが、娘は母親の言葉を守って口をきかなくなった。彼女が17、8になった頃、橋を架けた役人の息子が父親に詫言を入れに来て、娘を見初めたものの、「口がきけない者を嫁にもらってよいものだろうか」と思案してしまった。そこで娘の父親が「今からはね、おまえはこの人の嫁になって、出世するから、口をひらきなさい」と娘を諭すと、彼女は言葉を発するようになり、めでたく嫁入りしたという⁷。

他のバリエーションを見ると、話の後半部分が語られず、母親の死で終わっているものもある（儀間、渡慶次）⁸。娘に求婚する男性にしても、普請監督の息子という凝った設定ではなく、「ある偉い人」「侍」とだけしているものもあれば（楚辺、宇座）⁹、「とても位の高い人（上ぬ人）」（座喜味）「首里の王家の息子」（与那原）というシンデレラストーリーに仕上げている話もある¹⁰。娘が口を開く場面については、母親の化身である蝶が飛ぶのを見て口を開くバージョンも多い（与那原、座喜味、伊良皆、瀬名波、高志保等）¹¹。この文学的な結末は、後で見ると沖繩芝居に由来するものである可能性がある。その

他には、結婚後に初めて口を開くという話もあるが（波平）¹²、「色気づいて、（略）海に遊びに行って、色男に出会い、そうこうしている間に、ちょっとしたはずみに一言だけ言ってしまった」という笑話のような展開もある（喜名）¹³。このように種々のバリエーションが存在することは、伝説のドラマチックな筋立てが話者たちの想像力を刺激するためであろう。

残念ながら、「真玉橋の人柱」は沖縄独自の物語とは言い難い。大阪の川を舞台にした「長柄の人柱」伝説がベースにあることは明らかである。俚言「雉も鳴かずば撃たれまい」の源となったこの物語は、早くも14世紀中頃に編集された『神道集』に登場する。橋が何度架けられても流されてしまうので、人柱を立てることが考えられていたところ、1人の男が通りかかり、「膝の破れを白い布切れで繕った浅黄の袴をはいた人」を人柱にすればよいと述べる。当の男こそがまさに今述べたような格好をしていたため、彼はたちまち捕らえられて人柱にされてしまった。同行していた彼の妻は夫の死を悲しみ、「物いへば長柄の橋の橋柱鳴かずば雉のとられざらまし」と詠み、幼い子と共に川に身を投じた。後に彼女は橋姫明神として祀られたという¹⁴。類話は様々な地域に存在する。

自ら身の破滅を招いた男性が女性に転じ、ものを言わなくなった娘が後で幸運を掴むことになった点は異なるが、真玉橋の伝説が日本本土の物語と結びついていることは確かである。問題は、どのようにしてこの話が真玉橋を舞台とするものになったかであるが、この点について中村の論考を見てみたい。

2 真玉橋伝説の成立過程

中村が最初に検討を加えたのは、広く膾炙していた「『真玉橋の人柱』は、平良良勝作の沖縄芝居『真玉橋由来記』（1935年頃に初演）から生まれた伝説である」との見方である。平良の戯曲の筋書きは、一部を除けば確かに『日本伝説体系』収録のバージョンとほぼ重なっている。芝居を通じてこの物語を知った人は多いようであり、伝説流布のプロセスの中で大きな促進力となったことは間違いない。戯曲のクライマックスは、蝶が舞うのを見た娘が口を開く場面である。同種の展開を語った民話の語り手たちは、この芝居の影響を受けた可能性があろう¹⁵。

しかしながら、平良の劇以前にこの伝説が沖縄に存在しなかったとは言い難い。中村は、沖縄各地の民話集に収録されている類話を比較した結果、平良の作品には無い要素、むしろ「長柄の人柱」に近い要素を持つ話が散在することを見出し、平良の戯曲以前から各地で同種の話が伝えられて来た形跡を指摘する。長柄の伝説自体が当時の沖縄で知られていたことは、「人先物言いねーながらの橋」といった諺が島袋源七の『山原の土俗』（1929年）に含まれていることからもうかがえる¹⁶。

中村は触れていないが、沖縄出身の民族学者・金城朝永が1933年に刊行した『異態習俗考』においても、すでに真玉橋の話が言及されている。「人類犠牲譚」の章において金

城は「長柄の人柱」の話を書いた後、「琉球にも之れに似た話がある。数百年前那覇港に注いでる國場川に眞玉橋と云ふ石橋を架ける時、人柱を立てることになつた。そこに一人の巫女がゐて、人柱にする者は、七色の元結で髪を結んだ人をせよと云ひ出したので、探して見ると云ひ出した御本人が七色の元結をしめてゐたので、遂に人柱に立てられ、さすがの難工事も成功したと云ひ傳えてゐる」と記している¹⁷。

金城が眞玉橋の話を知ったのは1933年以前である以上、平良の劇の初演以前である。彼がどのようにしてこの話に関する知識を得たかは定かではないが、上の文章を見る限り、金城はこれを沖縄に伝わる口承と信じているように見える。中村の考察通り、平良の戯曲が現れるより以前に、本土から伝わった「長柄の人柱」の話が沖縄の話にすでに転化していたと考えるべきであろう。種々の情報をもとに中村は、「どれほど遅くても大正頃には現在の『眞玉橋の人柱』に近い伝承が流布していた可能性が推測される」と結論づけている¹⁸。

3 人柱伝説と女性の髪

それでは、人柱の物語がなぜ眞玉橋に結びついたのであろうか。この点について、中村は興味深い情報を入手している。眞玉橋建設の功労者であった大嶺親雲上の子孫の家系には、橋の建設に際して「七人の若い女性の髪を長く切り元結にして埋めた」という伝承が伝わっているというのである¹⁹。中村は、「おそらく、その行為には橋の安泰を祈りこめる呪術的な意味があつたのであろう」とし、女性の髪を埋めたとする話が「長柄の人柱」の話と結びつき、七色元結の伝説と転化した可能性を示唆する²⁰。

毛髪の意味について中村はこれ以上の議論はしていないが、民俗学においては、水上における安全と女性の毛髪には深い関係がある。この点を、以下に詳しく見てみたい。

毛髪と建築工事、人柱伝説の関連性は、すでに1970年代に宮田登が指摘している。宮田は、建物の棟上げの儀式の際に女性の毛髪や髪道具を供える習俗が存在することを指摘し、この習わしに後から人柱伝説が結びついた可能性を指摘している²¹。古来、毛髪には強力な霊力が宿ると見做されており、神社仏閣に奉納されたほか、呪術にも用いられたのである²²。

宮田も言及しているが、特に女性の毛髪は船の安全を守るものともされていた。桜田勝徳は、航海の守護神として船に安置する「船霊」として、女性の髪を縫い込んだ人形や、或いは毛髪自体を御神体として祀る習俗が全国各地に存在することを報告している。毛髪の提供者は船主の妻や妊娠中の女性、月経前の少女など、地域によって差があるが、概して女性である。特に伊豆諸島では、「船霊の御神体には女の髪の毛を欠くことができない」とされ、毛髪を提供した女性は「船霊ササギ」として、その船を守る巫女的な存在と見做されていた²³。桜田は、人形を船霊として祀る習俗は後代に生まれたものであり、女性の髪をそのまま御神体として祀ることを船霊信仰の本来の姿として考える²⁴。このよう

に、女性の髪は海上における危難を防ぐ力があるとされていたのである。

毛髪をめぐるこうした習俗は、どのような信仰に基づいているのであろうか。桜田は、この慣習を沖縄の「おなり神信仰」と結びつける。広く知られているように、沖縄には、姉妹は兄弟を守護する霊力を持つと考える伝統があり、旅立つ男性は姉妹から髪の毛や手巾を護符として受け取っていた²⁵。久高島における家族関係を研究した比嘉康雄も、男性の安全を祈るのは妻の役目であっても、実際に守護神とされるのは男性の妹であり、船出の時には兄は妹の髪の毛3本を船に祀って「舟ダマ」にすると述べている²⁶。これらは姉妹の髪であるが、崎原恒新は、船霊として米や粟等に加えて少女の髪（「一三歳以下の奇数の年齢の女の子（処女）の髪に限った」）を船に載せたとの糸満出身者の話も記している²⁷。

また、髪を渡すだけではなく、願掛けのために髪を切ることも行われていたようである。「おなり神」は奄美諸島でも信じられていたが、徳之島にはこのような歌（「くぶなわ口説」）が残されている。

くぶなわ はんしやれじよが
したん くとや
なんどぬ めんばちぐわんよ
はさん とばち
うなりぬ めんばちぐわんま
はさん とばち
ももだ しるがび
うれ うちゅち
いんだぶ むぬしり
たんで あげて
もりもり てらでら
ぐゅんや たでて
くぶなわ あがらしゅ
ぐわんや たでて²⁸

意味を記すと、「くぶなわのはんしやれが したことは 自分の前髪を 挟み切り 姉妹の前髪も 挟み切り ももだの白紙に それをおいた 犬田布の物知りを 頼み上げて 森々 寺々に 願を立てて くぶなわを上がらせる 願をたてた」となる²⁹。前髪を切り、島内の「むぬしり（呪術者）」に男性の無事を願う祈禱を頼んだというのである。旅人の安全のために髪の霊力に期待する古来の考えが反映されている³⁰。

毛髪にそのような呪術性が認められていたとすると、真玉橋の工事の際に女性の髪が埋

められたとしても、不自然ではないであろう。真玉橋は度々の水害で破壊されており、船上と同様に水難からの安全を祈願する必要があったからである。殊に橋は2つの世界をつなぐ象徴的な場であり、人の世界と同時に水の世界にも属する境界領域でもあった³¹。超自然的なリスクのあるこの場所を、女性、特に霊威ある神女の形代を以て守ろうとするとは、理解できることである。

1522年4月に最初の本橋が完成した際には、聞得大君が真珠道と真玉橋の落成式に出席して神託を唱えている³²。同種の光景が、1708年の石橋完成の際にも見られたのであろうか。石橋建築が莫大な数の労働者と巨額の費用を要した国家事業であったことを考えると、その可能性はあろう。もしや、聞得大君の導きのもと、神女たちが自らの髪を提供するようなことはなかったであろうか。仮にそのようなことがあれば、下の古琉歌に見られるような思いが多くの人々の心に刻みつけられた筈である。

聞得大君のおすぢお光に

旅の道ひろく行きやい来ちやい

(聞得大君の御霊光のおかげで、旅の道がひろく何の障害も無く無事に行ったり来たりすることができるようになった。まことに目出たいことである)³³

実際、古くは真玉橋の中央には毎月1日と15日に花や酒等が供えられ、村民が拝していたという³⁴。何らかの尊いものがその位置に祀られていたからではないだろうか。そうであれば、宮田が考えたように、髪奉納の話が後代において人柱の話と結びつくことはあり得ることである。このように考えると、毛髪奉納の伝承が、後に「長柄の人柱」等の影響を受けて人柱譚に転化したと考える中村の洞察は、鋭いものと言うことができる。

4 人柱の背後にある思想

真玉橋の伝説の他に、全国には膨大な数の人柱伝承が残されている³⁵。人柱の研究において、この橋の物語はどのように位置づけることができるのだろうか。

人柱については長い間、確たる研究が存在しない空白の状態が続いていた。戦前を見ると、人身御供伝承の真实性をめぐる加藤玄智や柳田国男、高木敏雄による議論、1925年の皇居二重櫓付近における人骨出土に触発された講演等が存在する。しかしながら、戦後の研究としては、小松和彦編『怪異の民俗学7 異人・生贄』（2001年）に収録されている数篇の論文を含めて、ごく少数にとどまる³⁶。人柱伝承の知名度を考えると、研究者の関心の低さが際立っている。

人柱をめぐる議論が不活発であった1つの要因として、人柱と人身御供（生贄）の区別が曖昧なまま扱われ、人柱の目的や機能が研究者にとっても不明確であったことが考えられる。この状態に一石投じたのが、笹本正治の論考「人柱伝説の背後に一普請・災害に対

する意識の変化―」（1993年）である。

この中で笹本は、神や妖怪などが占有している場所である自然界を人間のものとする改変が普請であり、そのための手段の1つが人柱であったと論じる。古来日本には、不慮の死、異常な死を遂げた者はその現場に留まるとの意識があった。「人柱での死は特別な死であり、人柱になった場所に霊が留まり、人間が支配できると考えられたのではないだろうか。これによって河原など本来あの世の住民の権利が強く人間が占拠できない場所を、人間の側に引き付けうるのである³⁷。」当初は、自分の領域を侵された神の怒りを鎮める意味で捧げられていた人柱が、人間が神の土地を支配下に置くための手段として変化して行ったと見るのである。

この流れは、人柱となる者の変容にも反映されている。本来は神が選んだ稚児や娘が人柱として捧げられて来たものが、次第に宗教関係者（巫女・巡礼・六部・僧侶など）となり、後には庄屋や普請の責任者のような共同体の代表、最終的には「人柱は誰でもいいのだという考え」に至ったと笹本は論じる³⁸。共同体の維持を目的とする「人間主体の視点」が、この変遷のベースにはある³⁹。治水技術の発展も、これらの変化の背景にあるのであろう⁴⁰。

笹本が指摘したように、人柱を立てる目的や意味が歴史の中で変化していることは、人柱について考える上で重要である。笹本以降の研究においては、神に対して犠牲を差し出す人身御供と人柱の違いを峻別することが基本となる。『神、人を喰う―人身御供の民俗学』（2003年）において人身御供譚の深層を分析した六車由実は、中世期においてすでに「人身御供」「人柱」が別種のもものとされていたことを指摘する。地域の神の贄とする「人身御供」は共同体の構成員から出さなくてはならないが、「人柱」は正規の成員ではない「異人」でも良く、むしろその方が呪術的な効果の増幅を期待できる等、根本的に意識に違いが見られるのである⁴¹。

別の論考「人柱の思想・序論」（2007年）において六車は、人柱譚においては災の原因としての神の姿は薄く、むしろ人間のほうが神として祀り上げられる結果になることを強調する⁴²。「人柱」という言葉自体、人間が建造物の土台となることにより守り神となるというイメージを含むものである⁴³。ここでは主体は完全に人間であり、「神が不在である代わりに、人々は、橋や堤を永遠に護ってくれる人神を作り出すために、ある特定の人間を人柱として犠牲にしていたのではないかとさえ考えられる」と六車は論じる⁴⁴。その場合、笹本のように「人柱は誰でもよかった」と言い得るかは難しくなろう。六車は、各地の伝承において人柱とされる者の種類が多様であることを指摘し、「人柱は、人身御供のように一定の基準があるわけではなく、その地域、あるいは時代によって、最も効果的だと思われる条件がそれぞれ個別に判断されていたのではないだろうか」と考えるが、妥当な見方と言えよう⁴⁵。

こうした近年の研究をふまえて「真玉橋」伝説を見直すと、どのようなことが見えて来

るだろうか。大多数の人柱伝承と同様、この話には、災禍の原因をなす神も贄を受け取るような異界の存在も登場しない。犠牲者が男性ではなく、託宣めいた言葉を発する巫女的な女性とイメージされたことは、沖縄の信仰も影響していると考えられる⁴⁶。「地域・時代によって最も効果的だと思われた人物」が、沖縄の場合は「あっちこっちの村を拜むのをやっていた」女性、役人がその言葉を尊重するような霊力ある女性だったのである⁴⁷。このように、人柱譚には地域性が反映されることが見て取れる。

5 人柱の可能性がある人骨の出土

笹本や六車を含めて近年の研究において目を惹くことは、実際に人柱が立てられた可能性を積極的に認めている点である⁴⁸。人柱を研究するにあたって最初に突き当たる困難は、人柱を立てたと記した同時代の記録が存在しないことであろう。とはいえ、記録の不在は行為の不在を示すものではない。「人柱」という言葉の初出は13世紀の『平家物語』であり、中世の頃からその概念が広く知れ渡っていたことがうかがえる⁴⁹。現実に行われることがあったからこそ知られていたのではないかと考えたいのが自然である。

興味深いことに、1600年頃に日本に滞在していた西洋人たちも人柱の習俗を聞き知っていた。『日葡辞書』（1603年—04年）は、「これは、呪術者がその必要があると言う時に、人間を一人生きながら海などに投げ込むことであって、この投げ込まれる人間をFitobaxira（人柱）と言う」と述べている⁵⁰。日本滞在歴が長く、オランダ商館長としても活躍したフランソワ・カロンも、著書『日本大王国志』（1645年）の中で、殉死の慣習について説明した後、明らかに築城時の人柱のことと解される文を記している。

ある君主が皇帝のために、あるいは自分の領土で自分の住所のために、高い石垣を積もうとする時、臣下中石垣の下積となる名誉を得んと請うものがある。自ら進んで生命を投げ出した人の肉の上に立つ石垣は、如何なる事変にも倒潰しないという信仰があるからだ。かかる場合、彼らは土台の下に横たわり、釣るしてある大石を自分の身体の上に下さしめ、これによって即坐に圧死せられてしまう。（幸田成友訳）⁵¹

情景の描写は具体的であり、その真実性をカロンは疑っていない。直接その場面を見た者から聞いたのではないかと思いたくなるほどである。

真玉橋の話が示すように、人柱伝承があるからと言って、実際にその場所で人柱が立てられたとは限らない。しかしながら、数例とはいえ人柱のものと疑われる人骨が出土したケースが存在する。今後の研究に資するために、これらの事例を詳述しておきたい（すでによく知られている皇居二重櫓のケースは割愛する）。面白いことに、この中には沖縄の事例も含まれる。

人柱伝説が伝わる場所で人骨が発見されたケースは、1点のみである。新潟県上越市板

倉区は地滑りが多い地域であり、民の苦労を知った旅の僧が人柱となって災厄を止めたという伝説が語り伝えられていた（大蛇が地滑りを起こすことを画策していることを知って人柱となった、とのバージョンもある）。1936年3月、この地で大甕を被った座禅姿の人骨が出土する。後に、この骨の主は関西系で40歳前後、肉体労働者ではないが健脚の男性であったことが判明し、旅僧の言い伝えと一致することから、伝説中の人柱と判断された。現在、人骨は同地区の「人柱供養堂」に安置されて一般公開されている⁵²。

座禅を組んだまま地に埋まるという形は「即身仏」を思い起こさせるが、ここで思い出されるのが、岐阜県大垣市の池尻城跡で明治時代に発見された木棺である。中に入っていた遺体は、長年水に漬かっていたため水蠟と化し、刀が共に納められていたため武士のものとした。一帯は墓地ではなく、出土した棺はこの1つである。現場は二の丸の裏鬼門であった可能性があるが、なぜこの死者のみ城中に葬られたのであろうか。謎を深めたのが、棺の蓋に直径5センチほどの穴が開いていたことである。伊藤ていじは、この穴は通気用の竹パイプを入れた穴であり、土中で鉦を鳴らしながら武士が人柱となった可能性を考察するが、これは即身仏となる僧と同じやり方である⁵³。時期は定かではないが、池尻城は1584年に廃城となっており、それ以前であることは確かであろう。

城跡で発見された人骨が、公に人柱のものであると見做されたケースが1例のみ存在する。場所は、大分県速見郡にある日出城跡の最南端部である。この石垣の基礎部分から1960年、1体の人骨と陶製の翁像が入った木棺が発見された。死者は老齢の武士であり、棺を覆う大石から兜の金具が見つかったことから見て、然るべき儀礼と共に石垣の下に埋め込まれた人柱であると推測された（なお、この場所も裏鬼門である）。現在、発見場所には武士の霊を祀る「人柱祠」が設置され、由来を述べる日出町教育委員会の説明板が立てられている⁵⁴。日出城の築城は1601年—02年のことであり、カロンが記した光景とよく似ている点に注目したい。

人柱と目された人骨が出土したもう1つのケースが、実は沖縄にある。1983年、浦添城の城壁裏側付近から20歳前後の女性の骨が出土した。身長は約150センチ、埋葬の穴はギリギリ死者の身体が入る程度のサイズであり、骨の下には石灰岩礫が敷き詰められていた。「仰臥屈葬で、顔は横向きである。特徴なのは、人骨が両腕、両脚を胴体に密着するまで強く折り曲げられている点である」と発掘調査報告書に記されている通り、相当不自然な埋葬であった⁵⁵。なぜ、そのような形で若い女性の遺体を城壁近くに埋めなくてはならなかったのか。結論は出なかったが、当然ながら人柱説がささやかれることになった。

謎めいた人骨が沖縄の城跡から出土したケースは、他にも存在する。1985年、沖縄の勝連城跡三の曲輪南東側から、約4歳の性別不明の幼児の人骨が出土した。時代的には、城が交易等で繁栄していた14—15世紀のものとしてされている⁵⁶。城のこの位置に埋葬した理由は不明であり、人柱説も出たようであるが、浦添城の女性ほどは騒がれていない。

興味深いのは、1990年に首里城右掖門近くの内郭石積み内の岩陰から発見された人骨である。35—45歳の男性のものであり、身長は156—158センチ、がっしりした屈強の者だったとされる。岩陰であったところに遺体を置いて風葬に付し、骨と化した後に若干動かしたものと見られ、グスク土器も置かれていた。関心と呼ぶ点は、右前頭部に4センチにわたる刀傷があることである。右側から斜めに振り下ろされた刀を受けたと見られ、相当な出血があった筈であるが、治癒の跡があり負傷後も生存していたことが分かる⁵⁷。

どのような理由で、この男性を城の内郭で風葬に付すことにしたのであろうか。危機を生き延びた名戦士にあやかろうとしたのだらうか。しかし、他に同様の被葬者が見られない上に、頭部以外に傷が無いことも歴戦の強者としては不自然である。傷の状態を考えると、振り向きざまに斬りつけられた可能性もあると見られる⁵⁸。政争に巻き込まれて襲撃されたのであろうか。人柱と言えないまでも、彼の風葬には何らかの儀礼的な意味があったのではないか。

以上見て来たように、人柱であった可能性がある人骨は数か所で出土しており、沖縄も例外ではない。更なる検証が必要であらうが、人柱の史実性については積極的に考えてよいのではないだろうか。ただし、仮に琉球の城で人が犠牲に供せられたことがあったとしても、真玉橋の話に影響を及ぼした可能性は無さそうである。

結び

本論は、中村の論考をもとに、真玉橋の伝説が織りなす豊かな民俗の世界を追って来た。中村が指摘するように、この物語は平良の戯曲が登場する以前から沖縄で語られていたものと見ることができる。「7人の女性の髪を埋めた」との家伝も、女性の毛髪に人を守護する力を見る習俗の存在を考えると、あり得ることである。もしも髪を提供したのが霊威ある神女だったのであれば、尊い形代を埋めた遠い記憶が、「長柄の人柱」話を受けて宗教者の女性を埋めたとの話に転じたとしても不自然ではない。原話では男性であった犠牲者が女性に転じたことは、沖縄の地域性に合わせて人柱のイメージが変化したのであろう。これらの点を考えると、真玉橋の物語は人柱伝承の研究においてユニークな位置を占めると言える。

人柱の実態については、今後新たな人骨の出土があれば大きな進展を望むことができる。と同時に、人骨が必ずしも人柱ではなく、特殊な葬送儀礼に基づくものであると判明する可能性もあろう。勝連城跡の幼児埋葬も、幼な子や死産児の遺体を屋敷内に葬る旧習と関わりがあるのかも知れないし、首里城の風葬も、何らかの習わしが背景に存在すると考えられる。仮に浦添城の女性が人柱であったとしても、実際に生身の人間を埋める前に、城を守るための呪術的手段が何段階か存在した筈である。将来の人柱研究が、こうした儀礼の世界、琉球の城の性格、自然の脅威に囲まれていた共同体のあり方についても新たな光をあてるものとなることを期待したい。

- ¹ 中村史「沖縄・豊見城村の伝説『真玉橋の人柱』」『小樽商科大学人文研究』第97巻（1999年）、1—25頁（274—298頁）。
- ² 真玉橋の歴史については以下を参照。久保孝一「木橋から石造橋へ～真玉橋の変遷とその構造」『沖縄の土木遺産—先人の知恵と技術に学ぶ』（「沖縄の土木遺産」編集委員会編、ボーダーインク、2005年）、48—59頁。
- ³ 植村善博「琉球王国期における橋碑の建立とその背景」『佛教大学歴史学部論集』第9号（2019年）、9、20頁。
- ⁴ 同上、17頁。
- ⁵ 久保、49頁。
- ⁶ 「真玉橋の人柱」『日本伝説体系』第15巻（南島篇）（福田晃編、みずうみ書房、1989年）、439頁。
- ⁷ 同上、440頁。
- ⁸ 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『儀間の民話』（読谷村教育委員会、1983年）、95—97頁。読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『渡慶次の民話』（読谷村教育委員会、1985年）、67—68頁。
- ⁹ 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『宇座の民話』（読谷村教育委員会、1984年）、53—54頁；読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『楚辺の民話』（読谷村教育委員会、1992年）、64—67頁。
- ¹⁰ 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『座喜味の民話』（読谷村教育委員会、1990年）、113—119頁；遠藤庄治編『よなばるの民話』（かいほう、1990年）、394—396頁。
- ¹¹ 遠藤、前掲書；『座喜味の民話』；『宇座の民話』；読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『伊良皆の民話』（読谷村教育委員会、1979年）、86—91頁；読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『瀬名波の民話』（読谷村教育委員会、1982年）、66—68頁；読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『高志保の民話』（読谷村教育委員会、1985年）、29—31頁。以下にも登場。読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『渡具知・比謝・比謝缸の民話』（読谷村教育委員会、2003年）、51—57頁。
- ¹² 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『波平の民話』（読谷村教育委員会、1989年）、27—29頁。
- ¹³ 読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『喜名の民話』（読谷村教育委員会、1989年）、72—74頁。
- ¹⁴ 『神道集』（貴志正造訳、11刷、平凡社、1978年）、113—115頁。稲田浩二は、この物語と酷似した話が原始仏典『ジャータカ』に見られることを指摘している。「雉も鳴かずば」の話も古くから中国に存在し、12世紀には『唐物語』を通じて日本で知られていた。稲田浩二「鳴ズハ雉子モ射ラレマジキヲ—人柱説話の成熟—」『昔話の源流』（三弥井書店、1997年）、210—231頁。
- ¹⁵ 実際、「真玉橋の人柱」を語った一話者（波平君江、明治44年生まれ）は、語りの最後で「そういうアシビ（芝居）があったよ」と加えている。ただし、話者が見た「アシビ」が平良の戯曲であったとは限らない。『渡具知・比謝・比謝缸の民話』、57頁。
- ¹⁶ 中村、10—13頁。
- ¹⁷ 金城朝永『異態習俗考』（復刻版、批評社、1996年）、14頁。
- ¹⁸ 中村、14—15頁。
- ¹⁹ 同上、18頁。

- ²⁰ 同上、19—20 頁。
- ²¹ 宮田登「献身のフォルク」『怪異の民俗学 7 異人・生贄』（小松和彦編、新装復刻版、河出書房新社、2022 年）、101—102 頁。
- ²² 「髪はカミであり、これにさす髪道具のくしは靈（く）しを表すといわれる。したがって髪の毛は身体の部分の中でも、靈力のもっともこもる箇所と信じられた。髪の毛を切って神社に奉納するというのは、そういう意味で身体の大切な部分を神に供えることになった。」（同上、102 頁）。なお、毛髪にこもる靈力については以下も参照。飯島伸子『髪の世界史』（2 刷、日本評論社、1987 年）、3—43 頁。
- ²³ 桜田勝徳「船霊の信仰」『船』（須藤利一編、17 刷、法政大出版局、1995 年）、336—338 頁。
- ²⁴ 同上、341 頁。
- ²⁵ 同上、343 頁。桜田は牧田茂の研究に依拠している。「おなり神信仰」における守護者としての女性の役割については、以下を参照。比嘉政夫『沖縄の親族・信仰・祭祀—社会人類学の視座から—』（榕樹書林、2010 年）、39—53 頁；屋嘉宗克「民俗学的琉歌の研究（4）（上）：『おなり神信仰』を中心として」『沖縄国際大学文学部紀要 国文学篇』第 13 卷第 1 号（1980 年）、15—30 頁；鍋倉由記子「『おもろさうし』にみられるおなり神像」『日本文学誌要』第 54 卷（1996 年）、76—89 頁。なお、姉妹が白鳥や蝶（「真玉橋の人柱」中の母の化身を思い出させる）の姿で兄弟を見守っていることを歌った琉歌もある。
- ²⁶ 比嘉康雄「守護する者 守護される者」『神・村・人 琉球弧論叢』（仲松弥秀先生傘寿記念論文集刊行委員会編、第一書房、1991 年）、315—316 頁。
- ²⁷ 崎原恒新『琉球の死後の世界』（むぎ社、2005 年）、320 頁。
- ²⁸ 屋嘉、18—19 頁。
- ²⁹ 同上、19 頁。「ももだしろがび（百田紙）」は、17 世紀から生産されている琉球紙のこと。犬田布は徳之島南西部の地名。
- ³⁰ 現代の沖縄においても、魔除けのために髪を用いる事例が報告されている。崎原恒新は波照間島の北村で、あるビジュアル（霊石）と石垣の間に黒髪の束が安置されているのを目撃している。崎原、320 頁。
- ³¹ 異界との境界としての橋については、以下を参照。雨宮久美「橋の文化的意味—聖と俗の架け橋—」『国際関係研究』（日本大学）第 35 卷 1 号（2014 年）、29—40 頁。
- ³² 高良倉吉「古琉球碑文に見る王国中枢の防衛体制」『琉球アジア文化論集：琉球大学法文学部紀要』第 2 卷（2016 年）、3 頁。
- ³³ 屋嘉、17 頁。説明も屋嘉による。
- ³⁴ 久保、54—55 頁。
- ³⁵ 全国にいくつの人柱伝承が存在するか、正確な数は不明である。笹本正治は『日本伝説体系』等の資料をもとに 189 の伝承を列挙しているが、収録されていない話も多い（例えば、仙台市若林区の古城神社、大崎市の台崎縁切地蔵尊、厚木市の小野の堰神社、海老名市のお松の碑、徳島市の福島橋等）。各地の伝承集に収録されているもの、ネットで紹介されている郷土の話を含めれば相当な数となろう。笹本が挙げた伝承のリストは以下にある。笹本正治「人柱伝説の背後に—普請・災害に対する意識の変化—」『中世の世界から近世の世界へ—場・音・人をめぐって—』（岩田書店、1993 年）、332—343 頁。
- ³⁶ 小松和彦編『怪異の民俗学 7 異人・生贄』（河出書房新社、2001 年）。
- ³⁷ 笹本、360 頁。
- ³⁸ 同上、355—356 頁。

- ³⁹ 同上、355頁。
- ⁴⁰ 同上、360頁。
- ⁴¹ 六車由実『神、人を喰う—人身御供の民俗学』（新曜社、2003年）、202—237頁。
- ⁴² 六車由実「人柱の思想・序論—一人を守り神にする方法」『狩猟と供犠の文化誌』（中村生雄・三浦佑之・赤坂憲雄編、森話社、2007年）、265頁。
- ⁴³ 同上、267頁。
- ⁴⁴ 同上、265頁。
- ⁴⁵ 同上、269頁。この点について、六車は三浦佑之よりも慎重である。三浦は、人間の体が土台となって建造物を支えるものである以上、人柱は神に対する生贄などではなく（贄は食べられることが前提である）、捧げる相手もないことを強調する。「人間の骨が鉄骨となり、肉や血がコンクリートとなって、建造物を支えると考えられているのが、『人柱』だからである。」そのために「頑強な建材になるという強固な意志が必要になる」のであり、「受動的な人柱というのは、言語矛盾ということになるだろう。」確かに人柱伝承には、強固な意志を以て自ら人柱となることを志願した宗教者等の話も多いが、「長柄の人柱」も含めて、積極的ではない者の話も存在する。バリエーションの豊かさを考慮する六車の考察のほうが、現実味があるのではないだろうか。三浦佑之「人間鉄骨論」『狩猟と供犠の文化誌』、227頁。
- ⁴⁶ 中村も、犠牲者が女性に変わったことについて、「これは女性が神祭りに関わることの多い南島特有の心意であろう」と述べている。中村、20頁。
- ⁴⁷ 民話の語りにおいては、この女性は「ヌール（ノロ）」「ユタ」「神人」と呼ばれることもある一方、「ある女」「村の女」「ジョーグ女（おしゃべり女）」と形容されることもある。しかし、彼女の言うことを聞いて役人が七色ムーティーの女性を探し始める以上、只者とは思えない。『渡具知・比謝・比謝の民話』、55頁；遠藤『よなばるの民話』、394頁；『座喜味の民話』、110頁；『宇座の民話』、53頁；『渡慶次の民話』、67頁；『長浜の民話』、70頁。
- ⁴⁸ 「そうした幻想が共同体に共有されている限りにおいては、それが実行された可能性は大いにありうると私は考えている」（六車『神、人を喰う』、217頁）。『「人柱」が立てられたという事実を否定することはできないと思う』（三浦、238頁）。「この事実〔池尻城での人骨出土〕も、戦国時代に人柱がなされた可能性を示す」（笹本、365頁）。
- ⁴⁹ 笹本、363頁；六車「人柱の思想・序論」、266頁。
- ⁵⁰ 土田忠生、森田武、長南実編訳『日葡辞書』（3刷、岩波書店、1993年）、246頁；笹本、364頁。
- ⁵¹ フランソア・カロン『日本大王国誌』（幸田成友訳、平凡社、1967年）、139頁。三浦もこの文を引用している。三浦、240頁。ドイツの地理学者ベルンハルト・ヴァーレン（ヴァレニウス）は、『日本伝聞記』（1649年）の中で人柱に関するカロンの情報を引き写している。ただし、ヴァーレンは日本人が名誉のために人柱に志願するとの説明を理解できなかったようであり、「彼らは貧苦のために自らの死を願ってそのようにするのだ」との趣旨の文を加えている。ベルンハルト・ヴァレニウス『日本伝聞記』（宮内芳明訳、大明堂、1975年）、105頁。
- ⁵² 「人柱供養堂」日本伝承大観サイト <https://japanmystery.com/niigata/hitobasira.html>（2023年2月22日閲覧）；湯本泰隆「板倉訪問記：人柱供養堂と地すべり資料館」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第33巻（2018年）、1—2頁；「地すべりと人柱伝説」雪崩・地すべり研究センターサイト <https://www.pwri.go.jp/team/niigata/column.html>（2023年2月22日閲覧）。この事例は三浦も言及している。三浦、236—237頁。
- ⁵³ 伊藤ていじ『城—築城の技法と歴史』（3刷、読売新聞社、1975年）、11—28頁。笹本と六車も

言及している。笹本、365頁；六車『神、人を喰う』、217頁。なお、仙台市の古城神社には、竹で通気孔をあけて土中で鈴を鳴らしながら人柱となった僧の話が伝えられている。「古城神社」宮城県神社庁サイト <https://miyagi-jinjacho.or.jp/jinja-search/detail.php?code=311010020> (2023年2月24日閲覧)

- ⁵⁴ この解説板の全文を撮影した写真が以下のサイトに掲載されている。「日出城 人柱祠の看板」攻城団サイト <https://kojodan.jp/castle/333/photo/29741.html> (2023年2月22日閲覧)
- ⁵⁵ 沖縄県浦添市教育委員会『浦添市文化財調査報告書第9集 浦添城跡発掘調査報告書』(浦添市教育委員会、1985年)、58—59頁。三浦も言及している。三浦、237頁。
- ⁵⁶ 分部哲秋「沖縄県勝連町勝連城跡出土の中世幼児骨」『勝連城跡 環境整備事業報告書Ⅱ』(勝連町教育委員会、1988年)、95—113頁。
- ⁵⁷ 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡 右掖門及び周辺地区発掘調査報告書』(沖縄県立埋蔵文化財センター、2003年)、151—157頁；土肥直美『沖縄骨語り—人類学が迫る沖縄人のルーツ』(琉球新報社、2018年)、95—102頁。
- ⁵⁸ 沖縄県立埋蔵文化財センター、154頁。報告書には、浦添城や勝連城の人骨に対して人柱説が出たことが言及されているが、屈強の男性のものとされるこの人骨については別種のものとの考えが示唆されている。人柱を若い女性や稚児のものとイメージする傾向が見て取れる。沖縄県立埋蔵文化財センター、155頁、158頁。